学校研究について

１　研究主題

西川学園構想

自ら考え、対話し、学びをつなぐ児童生徒の育成

～保小中で育てたい力を意識し、学び続ける授業をめざして～

２　主題設定の理由

西川小中学校ではこれまで『自ら考え、学び合い、高め合う児童・生徒の育成～子ども自らが課題に向き合い、学び続ける授業をめざして～』を研究主題に掲げ研究を推進してきた。これは、平成２６年度に西川町教育委員会より研究委嘱された「小中一貫教育」を受け、小学校、中学校が同じ研究主題を設定し共通実践を図ったものである。この研究主題のもと、これまで何度も小中の教職員が一堂に会し、探究型学習を中心とした授業実践を積み重ね、省察を繰り返してきた。その集大成として、平成２９年度に小中両校において「小中一貫教育実践研究発表会」を公開し、確かな成果を上げることができた。

そして、令和２年度からは、これまでの成果を土台にし、次期学習指導要領で謳われている「資質・能力」を育むための「主体的・対話的で深い学び」を具現化すべく、新たに『西川学園構想「自ら考え、対話し、学びをつなぐ児童生徒の育成」～保小中で育てたい力を意識し、学び続ける授業をめざして～』を研究主題・サブテーマに設定することにした。

現行の研究主題の「学び合い」から「対話し」にかえたのは、「対話」には、追究場面における子ども同士の協働学習に止まらず、教職員や地域の方との対話、または先哲の考えをもとに自己の考えを広げ深める「学習材との対話」、さらには振り返りの場面での「自己との対話」の視点を含めたからである。また、「学びをつなぐ」とは、「知識・技能が相互につながる」、「知識・技能が場面や状況とつながる」、「知識・技能が学習の目的や方向性、手応えとつながる」という「深い学び」の視点を表している。これからは、こうした「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業を見つめ直し、その実現に向けて授業改善することが求められており、そのような学びが「子どものどんな姿」なのかをイメージし主題に込めた。

また、研究主題・サブテーマを設定するにあたり、まずはじめに西川小中の９年間で育む資質・能力について明らかにすることにした。そこで、授業改善部会では、「年長前期」、「年長後期」、「小学校下学年」、「小学校上学年」、「中学校前期」、「中学校後期」の６つの発達段階において、「教育課程全体を通して育む資質・能力」について話し合い、系統立てて整理した。今後は、これらを小中の教職員全員で共有するとともに、それぞれが各教科で育む資質能力と組み合わせたり関連づけたりしながら、毎時間意識して授業を展開していきたい。また、こうした教科横断的な視点を持つことで、カリキュラム・マネジメントへの意識化も期待できる。以上の理由から、目指す授業の姿としてのサブテーマに「育てたい力を意識し」を盛り込んだ。

最後に、西川町では、保小中一貫教育を目指した「西川学園構想」を掲げている。保小中一貫教育を推進するためにも、15 年間でめざす子ども像を共有し、保小中一体となって西川町の子どもを育てていくことを共通理解したい。そのためにも、研究主題に「西川学園構想」を明示することで、保小中一貫教育の意識化を図った。

【研究主題】　目指す生徒の姿
『自ら考え』　→　《主体的》　『対話し』　→　《対話的》
『学びをつなぐ』→　《深い学び》
【サブテーマ】　目指す授業の姿
『育てたい力』　→　《資質能力》　『学び続ける授業』→　《探究型学習》

３　研究の方向性について

新学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、これまでの探究型学習の実践研究に加え、西川学園として目指す資質・能力を育むための「深い学び」につながる授業づくりに焦点を当てた研究を推進する。

（１）保小中でつけたい力とは

保小中の１５年間でつけたい力は、別紙の「育てたい資質・能力系統表」にまとめている。

その中でも、とりわけ小学１年生から中学３年生までの９年間を通して、子どもたちに考える力、根拠や理由を示して表現する力を身につけさせ、関わりながら学び合う子どもを育てていく。

① 自ら考え、判断し、自信を持って行動できる力	（主体的な思考・判断・行動力）
② 自分の考えや思いを伝え、聞き、話し合う力	（コミュニケーション力）
③ 困難に立ち向かい、ねばり強く解決する力	（問題解決力）

（２）探究型学習について

山形県教育センターの探究型学習推進プロジェクト事業研究報告書によると、本県における「探究型学習」について次のように定義されている。

> 探究型学習とは、「課題の設定」、「情報収集（文献・教材・資料の調査・フィールドワーク、実験、観察等の活動）」、「整理・分析」、「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに主体的に参加することを通して、知識・技能と学び方をバランスよく習得させながら、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等をはぐくんでいくことのできる多様な学習方法・形態の総称。

上記のように、探究型学習の基本的なプロセスは「課題の設定」→「情報収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」であるが、このようなプロセスを日常の授業で展開するのは困難である。そこで、県では、次のように解説している。

> 具体的な学習の在り方については、各学校のこれまでの取組みや児童生徒の実態等を踏まえ、学習中の児童生徒の学びのようす（内面における思考がどのように行われているかも含めて）を丁寧に見て取りながら、各学校において、主体的・協働的に探究していくことが求められる。よって、「探究型学習」の推進は、決まった「型」を定め、普及させようとするものではない。

そこで、授業における探究型学習のプロセスを

「課題」→「追究活動（見通し＋学び合い）」→「振り返り」→「新たな課題」→　・・・

という構成に置き換え、主体的な学びが螺旋的に連続するような授業展開ができないかと考えた。ただし、県の解説にもあるように、必ずしもこの「型」に当てはめるのではなく、生徒の思考の流れを予想しながら学習内容に合わせて柔軟に授業をデザインしていくことが求められている。

このような探究型の授業をしくむには単元の再構成が必要である。「この題材（小単元）では、ここで探究させる」という時間を意図的に組み入れ、知識・技能を身につけさせる時間、探究させる時間を計画的に編成しなくてはならない。また、探究型の授業を効果的に進めるためには、家庭学習の充実と学年・学級経営の充実も大切である。家庭学習については、授業における探究的な学びの時間を少しでも多く確保できるように、授業の中で知識・技能を活用して課題を解決するために取り組む活動と知識・技能を定着させるために宿題として各自に取

り組ませることを見きわめていきたい。学年・学級経営については、探究的な学びにつながる、探究的な学びを発展させるためのかかわりが持てるように、学校生活の諸活動における生徒のかかわりを大切にし、丁寧に指導していきたい。

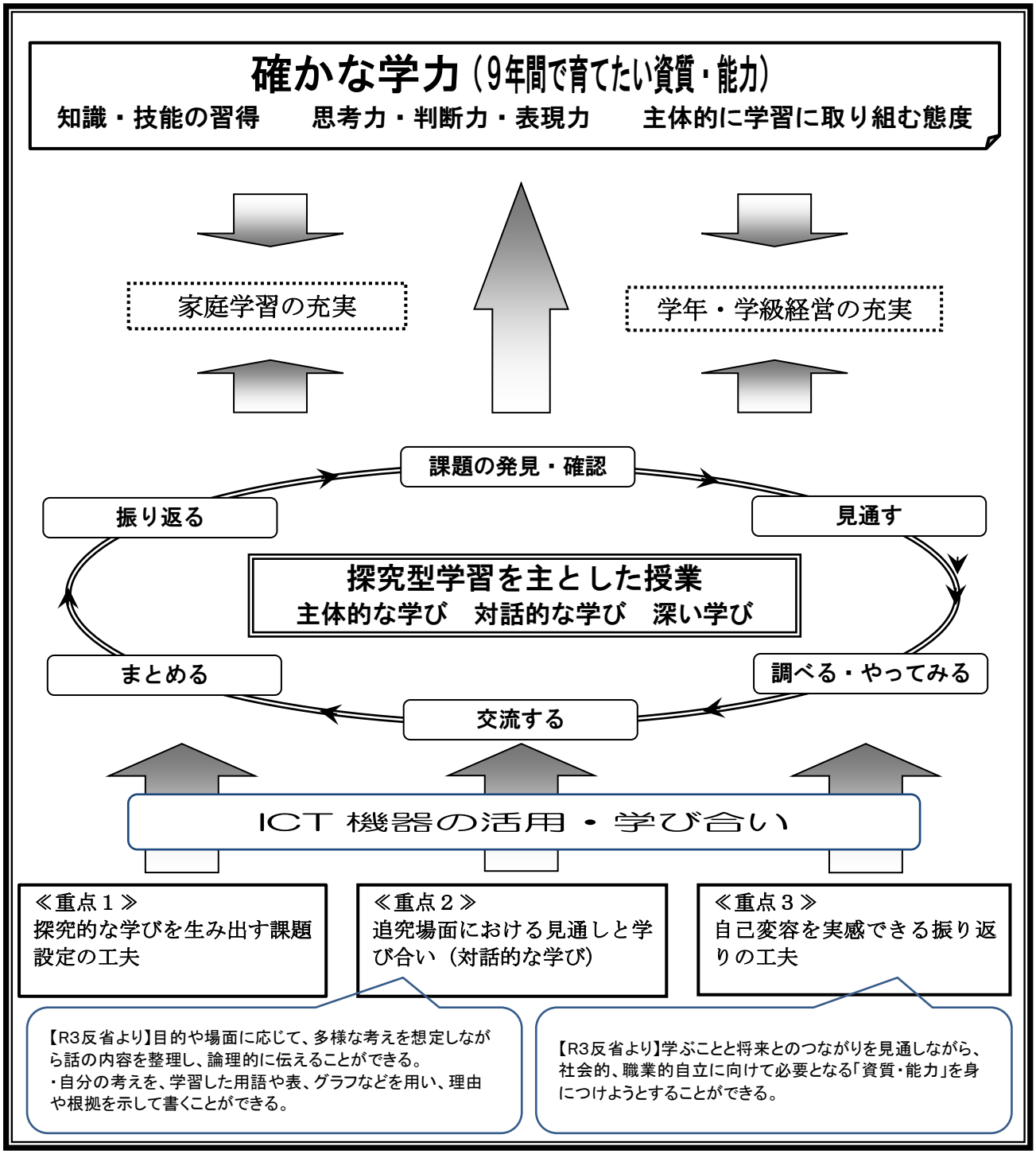
4　研究の全体構想図

学校教育目標

ふるさとを愛し、ともに学ぶ、たくましい生徒の育成

研究主題

西川学園構想　『自ら考え、対話し、学びをつなぐ児童生徒の育成』
～保小中で育てたい力を意識し、学び続ける授業をめざして～



５　研究主題・サブテーマと求める子どもの姿

小中一貫実践研究テーマとして、西川町のめざす子どもの姿を明確にした研究主題と、それを実現する授業の姿をサブテーマに設定した。

（１）研究主題「自ら考え、対話し、学びをつなぐ児童生徒の育成」

①「自ら考える」生徒とは…

・課題に対して「なぜだろう」「どうすればいいだろう」と真剣に考え、解決への見通しを持って、主体的に粘り強く取り組む生徒。

・学習を振り返り、新たな課題を見つけたり、次の学習につなげられる生徒。

・学んだことを自分事として、実生活や自分の将来と結びつけて考えられる生徒。

②「対話する」生徒とは…

・相手の考えや心情に寄り添って、話を聴く生徒。

・「ここどうすればいいの？」と自分から訊く生徒。

・訊かれたら、相手がどこでつまずいているか、何を悩んでいるのかを考え、考え方を伝えたり、答えを導く過程を説明したりする生徒。

・自分の考えを相手にわかるように伝えようとする生徒。

・自分と他者の意見や考え方を比較したり、新たな気づきを得たりしながら、考えを広げ、深めることができる生徒

③「学びをつなぐ生徒」とは…

・新しく学んだことを既習事項と結びつけて考えたり、表現できる生徒。

・必要な情報を選択したり関連付けたりして、自分の考えをつくりあげられる生徒。

・学んだことや課題解決の方法を活用し日常生活での問題を解決したり、より高い目標に向かって挑戦しようとする生徒。

（２）サブテーマ「保小中で育てたい力を意識し、学び続ける授業をめざして」

①「育てたい力を意識」とは…

・「各学年の発達段階に応じた目指す子どもの姿」、「その単元で身につけさせたい資質・能力」を明確にして、単元・題材等のまとまりを見通して構想すること。

②「学び続ける」とは…

・単元をつらぬく課題に向かって、一時間一時間の授業で学んだことを生かして、子どもが主体的・継続的に学んでいく姿。

６　研究の方法

（１）研究の領域

道徳、学活、総合的な学習の時間を含む全教科、全領域とする。特に、「特別の教科道徳」の評価についても研究を進める。

（２）研究の重点

①探究的な学びを生み出す課題設定の工夫

（ア）教科におけるカリキュラムマネジメントの実施

探究的な授業を実践するには、子どもがじっくり取り組むことができる時間を確保する必要がある。そのため、単元を通して身につけさせたい力を明確にしたうえで、授業者が単元を編成し、計画的に探究的な授業を仕組んでいく。

（イ）家庭学習と連動した単元計画の作成

家庭学習を意図的に単元計画に組み込むことで、探究するための時間を創出し、子どもにわかる喜びや新しい価値にふれる喜びを味わわせる。

（ウ）学年・学級経営の充実

ＱＵ等を活用して子どもの実態や思いを把握し、自己有用感が実感できるような学年や学級経営を目指し、探究型学習の基盤をつくっていく。

②追究場面における学び合い（「対話的な学び」）を生み出す指導の工夫

（ア）学習の内容やねらいに応じた多様な学習形態の工夫

個人での追究活動を基本に、以下のような場面でペア学習やグループ学習、全体での意見交流を取り入れるようにする。

・多面的な思考（多様な考えや意見）を引き出す必要がある場面で。
・対話によって思考を深めたり広げたりする必要がある場面で。
・発想の質を高め合う必要がある場面で。
・自分と他の意見を対比させて考えることで思考が深まる場面で。
・１つの作業や実験をもとに、考えを深める場面で。

（イ）「対話的な学び」を生み出すための指導の視点・手立ての明確化

ペア学習やグループ学習、全体での意見交流を仕組む際に、以下のような指導の視点や手立てを明確にして授業を計画する。

・「何を考えさせたいか」「どのような意見が出されるか」など、生徒の思考を事前にイメージした上で話し合い活動を行っているか。
・「意見を収束させる」「多様な意見を出す」など、目的を明確にして、話し合いの形態（ペア、グループ、全体）を設定しているか。
・生徒一人一人が自分の考えを持った上で、話し合い活動に臨んでいるか。
・「比較する」「分類する」など、話し合いを通じて考えを深めたり広げたりするための思考の仕方や、そのための手立て（ワークシートなど）を示しているか。
・話し合いの前に視点を確認したり、話し合いの後に考えの深まりを確認する場面を設けるなど、話し合いを充実させるための活動を行っているか。

（ウ）ＩＣＴ機器・思考ツールの活用

生徒の思考や学びを可視化し、「対話的な学び」を生み出すためのＩＣＴ機器・思考ツールの活用について研究を進める。

③「深い学び」に導く学習課題と自己変容を実感できる振り返りの工夫

（ア）探究型学習の原動力となる課題づくり

子どもが「知りたい」「調べたい」「解決したい」「こうなりたい」と思うような課題を設定したり、子どもが感じた疑問や気づきを基にした課題を設定したりすることにより、子どもが能動的、主体的に取り組むことができる課題づくりを行う。

（イ）次時につながり、自己変容を実感できる振り返り

「課題 → 追究活動（見通し＋学び合い）→ 振り返り → 新たな課題…」のように、スパイラルな学び（連続的に発展した学び）になるような振り返りを行う。また、自己変容が実感できるように単元ごとに振り返りシートを作成し、各単元の学習の前後で個人の変容が見て取れるような振り返りを目指していく。

①すべての教科で振り返りの時間を設定する。
②基本的に毎時間振り返りを行うが、学習内容によっては小単元の学習後に振り返る。
③各単元でつけたい力を明確にし、単元全体を見通して振り返りの時間を設定する。

④各教科で学習した専門用語を用いたり、個人をメタ認知できるように工夫する。
⑤単元を通して自分の成長が実感できるように基本的に振り返りシートを準備する。
⑥教科をこえて情報交換を行い、適宜見直しながら研究を進める。

（３）組　織（校長・教頭の助言のもとに話し合いを進める）
《研究推進委員会》 … 教頭・押野（研究主任）・桑原・小林

（４）授業研究会
① 第１回校内授業研究会
期　日 ：　５月３０日（月）
授業者 ： ２名 （１学年 … **吉田　　匠** 教諭　３学年 … **小林　裕美** 教諭）
② 第２回校内授業研究会
期　日 ： １０月１７日（月）
授業者 ： ２名 （３学年 … **宇野　隆義** 教諭　２学年 … **安藤　千廣** 教諭）
③ 第２回小中合同授業研究会
期　日 ： １１月１４日（月）
授業者 ： ２名 （２学年 … **奥山　　努** 教諭　３学年 … **後藤　達也** 教諭）
④ 第３回校内授業研究会
期　日 ： １２月　８日（木）
授業者 ： ２名 （１学年 … **桑原　祥子** 教諭　２学年 … **押野　一司** 教諭）
☆ ブロック研
期　日 ：　１月中旬までに実践する。
授業者 ：　１名（**永山　真次**　教諭）
※校内授業研、小中合同授業研の授業者をのぞく全ての教科担任が授業を公開する。
※学年ごとに授業研究会、事後研究会を行う。

（５）校内研修会
① 第１回校内研修会
時　期 ：　４月　６日（水）
内　容 ：「昨年度までの研究の確認と今年度の研究の重点について」
② 第２回校内研修会
時　期 ：　５月３０日（月）　第１回校内授業研後の全体研で
内　容 ：「指導と評価の一体化について」NITS動画研修
③ 第３回校内研修会
時　期 ： １０月１７日（月）　第２回校内授業研後の全体研で
内　容 ：「個別最適な学びを実現するICTの利用について」武石指導主事

（６）研究のまとめ
①「研究だより」を発行し、事後研で話し合われたことや学校研究に関連した情報などを共有する。
②１年間の実践をまとめ、研究集録（結晶）を作成する。